

ゴ ー ゴ リ と 日 本 文 学

川 端 香 男 里

「ゴ ー ゴ リ と 日 本 文 学」という大きな問題にとりかかる手はじめとして、まずきわめてつつま
しやかな問題の整理から入りこいと思います。

まず、ロシア文学が全体として、他の外国文学にくらべて、近代日本文学にきわめて大きな、
「特権的」とも言える影響を与えつづけて来たということです。それも、同じ一人の作家がずう
っと変らぬ影響をおよぼしているというのではなく、時代によっていわば、ロシア文学を代表す
るチャンピオンが次々と入れ変るとい形をとっているわけであります。明治時代に圧倒的に他
をしのいでよく読まれたトルゲ ー ネフは今日ほとんど読まれず、大正ヒューマニズムの時代を
日本の作家以上に代表する感のあったトルストイは今日、はるかにドストエフスキイの下位にあ
り、チェーホフにすらその位置をゆずっていると言えるかも知れません。

ではゴ ー ゴ リ はどうなのでしょう。まず翻訳紹介の歴史を簡単にたどってみましょう。早稲
田大学の大学院生の泰野一宏氏がこの分野での専門家で、詳細なビブリオグラフィーを作ってお
いでです。これと、国立国会図書館の作成した「明治・昭和 翻訳文学目録」(1959)をあわせ
見ますと、大体の方向はつかめます。

従来、他のロシアの大作家の場合、明治末期から大正にかけて(1890年代から1920年頃まで)、
ロシア語からだけではなく、他の西欧諸語からの重訳が数多く現われるのに、ゴ ー ゴ リ の場合だ
けはほとんどない、というのが定説でした。しかし泰野氏の調査によって、ゴ ー ゴ リ も他の大作
家と同じであることがわかりました。

研究紹介にしても嵯峨之屋(さかのや)おむろ、昇曙夢(のぼり・しよむ)の仕事が明治三十
年(1897)前後に出ています。ゴ ー ゴ リ 紹介の失駈者ともいえるその昇曙夢が、後年(昭和二十
八年-1953)書いた「日本文学と露西亜文学」という論文の中で、プーシキン、レールモント
フ、ゴ ー ゴ リ を一括して「日本では彼等の作品の原語よりする翻訳紹介が遅かったためか、或は
近代性を欠いているためか、それとも民族性の相違によるのか」他の大作家のような顕著な影響
は認められない、と簡単に片付けているのです。ゴ ー ゴ リ に関しては、「日本の自然主義時代に
多少の興味を惹いた」と付け加えてはいるのですが。

これはここでことさら反論するまでもない間違った議論です。第一民族性の相違があるからこ
そ外国文学が読まれるのではないのでしょうか。

ゴ ー ゴ リ 翻訳年表を見ますと、単行本、全集は昭和期(1926-)に集中しています。それ以前
は、雑誌中心でした。だから昭和以前にはゴ ー ゴ リ の影響は少なかったと多くの論者は言うので
すが、文学的影響というものは、同時に社会文化史的側面をもっているのですから、明治・大正
・昭和、それぞれの時代個々の「文学生活」というものを考慮に入れておく必要があります。雑
誌の数も少なかつた明治・大正期(もちろん本の出版とで数も今日とはくらべものにならぬくらい
少ない)には、文学志望者は、日々の新聞、月々の雑誌を最大の栄養源にしていました。雑誌こ
そ最も重要な源だったので。さらに外国の新知識にあこがれる当時の文学青年は、外国語で直
接読んだのです。この点丸善という洋書屋の果たした役割はきわめて大きいのです。全集という形

でまとまって与えられるよりも、まったく新しい作家に対するという感激で一作一作自分で読み、自分で発見して行くというプロセスほど、作家志望の青年にとって実りあるプロセスはないでしょう。

ゴーゴリの影響が過少評価されて来たのは、ひとつには出版コマースリズムの影響があります。これはもちろん、昭和期以降の問題です。大量に売れるものを出版社も訳者も追い求めるといのがコマースリズムの鉄則だからです。極端な例を申しますと、ゴーゴリの全集を出す出版社は必ずつぶれるというジンクスがありました。だからと言って有島武郎以下の日本の文学者に与えた影響を否定することはできません。それは作家の「文学的生活」とはかわりのないことなのです。

大きく言って、明治時代以降のほとんどの日本人の心を打ったのは、ロシア文学のヒューマンな部分であって、ゴーゴリの場合も大勢はそういう受けとめ方でした。芥川龍之介の場合はそのいい例と言えましょう。

他のロシア作家とくらべて、ゴーゴリを特徴づけていると思われる点をいくつか、ここで考えてみたいと思います。もちろん、日本におけるゴーゴリ受容の特徴点です。

ゴーゴリはきわめて複雑な作家で、それゆえに日本における影響史も錯綜してくるのですが、そのことは一応脇において、「受け入れる側」から、整理しておくことにします。

日本でゴーゴリを一番最初に訳した人は、英文学の教授でもあった上田敏です。『第一高等中学校校友雑誌』（明治26年、1893）にのった「ウクラインの夜」という文章です。

「ウクラインのよるをしれりや、あはれ美しきかの夜をしらずが、はやくゆきても見給へかし。なかぞらに月はてらしぬ。みるがまにひろがりたる蒼空の穹窿は今や、てりわたりて、息するやうなり。白銀の波、大地にたゞよひてうるはしく、空気はあやしくも息ぐるしきまでかぐはし。やさきいたはりはあたりにもちてにはひのうみのふるひ動ける。」

上田敏調の文章ですが、もちろん「五月の夜」(Майская ночь)の一節です。後のゴーゴリアン宇野浩二はまだこの時中学生でしたが、この文章を読み、それ以後ずっと一生ゴーゴリに憧れつづけたというのですからこれは大変重要な意味をもっています。ところで若干、脱線しますが、上田敏はこのテキストとして何を使ったのでしょうか。フランスのロシア学者エルネスト・デュピュイ (Ernest Dupuy) の「十九世紀ロシア文学の巨匠たち」 "Grands Maîtres de La Litt. russe au XIX^e s." (1885)という本に引用されている文章を訳したのです。しかも上田敏の使ったテキストは英訳本でした。つまりデュピュイが仏訳したものを英訳したのから日本語に訳したというわけです。しかし、これは当時としては別に珍しいことではありません。

ところでこの上田敏はゴーゴリについて、「ニコライ・ゴゴル・ヤノウスキ(1809-52)は露西亜の国民的小説家とも称すべく、特に小露西亜の風景と人情とを精写して、入神の筆あり。ウクライン春夜の文、ドニエプル大河の章、人工に膾炙し「死したる心」、「レキゾル」、「タラス・ブルバ」の作廣く歐洲の文学に愛重せらる。」と書いています。日本におけるゴーゴリ理解の第一点はまず、ロシアのこの「国民的性格」を最も親しみ深い形で表現した作家ということでした。日本にも大きな影響を及ぼしたモーリス・ベアリング(Maurice Baring—この人のロシア文学史の最初の翻訳はドイツ語からの重訳でした)や、メルキオール・ド・ヴォギューエ(Melchior de Vogüé)の立場も、これと相似たものでした。ゴーゴリの心性の複雑さも、いわばロシア固有の複雑さとして読みとることになります。しかし大体この立場では、ゴーゴリの作品に反映

された、詩的でユーモラスなロシアの国民性がクローズ・アップされることとなります。

ゴーゴリ理解の日本の特質の第二点、第三点をまとめて言ってしまうと、まずゴーゴリという作家その人の「謎めいた」個性から強い印象を受けたという点です。東洋的な「狂」の概念に近いものですが、デモーニッシュというよりは日常的なものから脱け出ることと言った方が近いと思われる。宇野浩二はその典型ですが、二葉亭四迷の『浮雲』の中に見え隠れしている（創作メモには、はっきりと主人公内海文三の発狂の構想があります）この作品の中心となっている「狂」の要素は、ゴーゴリの『狂人日記』からまっすぐにやってきたものです。

第三の点は、ゴーゴリの「笑い」の手法、語り口が、日本の作家の文体に具体的・直接的な影響を与えたということです。泰野一宏氏に、『浮雲』とゴーゴリの文体の類縁について指摘した労作がありますが、芥川の『芋粥』や『鼻』については、国文学者の側からも数多くの研究が出されています。ゴーゴリのこの面での影響の及んでいる底辺は相当に広く、信州大学の諫早勇一氏は、たとえば円地文子の次のような例を拾っておられます。

円地文子の自伝的小説『傷ある翼』（1960）の主人公滋子の、ゴーゴリを英訳で読む功德についてであります－

「ロシア文学を英語の翻訳でよんで、どういう功德があるかな」「いいえ、とても為になるわ。言葉を一つ一つ砕いて解ろうとするから、いいのね。私、これから小説を書こうと思っているから、文章や性格描写の骨組みみたいなものを知りたいのよ。ゴーゴリにそれがあるわ。」夏目漱石は芥川の『芋粥』の前半部を「細叙絮説に過ぎ」つまり、ごてごてと細部をつみ上げすぎると批評しましたが、その部分こそゴーゴリの文体から芥川が借用して来た部分です。ゴーゴリをロシアのディケンズとよくイギリス人は申しますが、ディケンズのユーモアを自家薬籠中のものとしていた漱石にとって、このところは「借り物」めいているという直感があつたのではないのでしょうか。

ゴーゴリと精神的に近い作家にE・T・Aホフマンがありますが、ホフマンからゴーゴリへと向う作家を何人かあげることができましょう。最も代表的な人として、内田百間と中田耕治が思い浮かびます。

自殺した芥川にとって、ゴーゴリ的な「狂」の世界は近かったはずなのですが、理知の世界にぎりぎりのところまでとどまろうとした芥川にとってゴーゴリの世界は、無縁でした。材源をいち早く、トルストイやドフトエフスキイに求めるようになったのも、ある意味では当然と言えましょう。川端康成は、「芥川氏のつくりごとの怪談も、自殺に近づくにつれて、怪奇妖漚を濃くしたが、やはり正気の理窟を超え切れなかった」と論評しています。

同じ文章の中で、康成はゴーゴリの狂気にくらべれば、ゴーゴリを受け入れた日本の作家は、「東洋風の墨絵」で書かれた狂気と言えると書いていますが、それはそのまま内田百間の世界であり、宇野浩二の世界であります。

ゴーゴリアン宇野浩二について多くの論者が注目し、私自身もかつて論じたことがありますので、改めて多言を費すことはいたしません。もちろん宇野浩二はロシア語を読めたわけでもなく、彼の時代に全集が完備していたわけではありません。研究書としては主としてスロヴェニヤ出身のスラヴィスト、ヤンコ・ラヴリン（Janko Lavrin）のゴーゴリ論を論み、英訳本をむさぼり読んだのです。

宇野浩二の場合は、まさに気質と方法という点でゴーゴリと一致している例であります。今日の日本作家のゴーゴリ受容はおおむねこの線上にあると言ってよろしいでしょう。

ただ以上の「三点」－教師業の常として、いつも三つに分けるのでありますが－からはずれている重要なポイントがあるとすれば、それは、芸術家と思想家との相克、文学と生活の相克というロシア文学を貫ぬく大問題が日本におけるゴーゴリ受容において、あまり問題にされなかったということでありましょう。二葉亭は明瞭にそのことを自覚していましたが、ゴーゴリのこの側面をもって深刻にとらえて自分の作品に生かした人を別に一人あげることができましょう。

それは日本人ではなく、1902年から1909年（明治三十五年から四十二年）に日本に留学していた魯迅でありました。魯迅は日本語からだけではなく、英語やレクラム版から（ドイツ語）からロシア文学の作品を翻訳し、ロシア語も学んで、後には『死せる魂』のような大作も訳すこととなります。魯迅の仕事に当時の日本のロシア文学受容の成果が反映されているのではないかと、というのが私の仮説ですが、魯迅専門家によってこのことが明らかにされれば、西洋対日本という単純な比較だけではなく、東アジア諸国にもひろがって行く比較研究の可能性が開けて行くように思います。

付記・以上の文章は、第三回日ソ文学シンポジウムの報告である。外国人参加者を意識した「啓蒙的」序論であるが、何らかの問題提起にもなるかと考えて、ここに再録した。筆者自身にとっても一つの研究の出発点にすぎない。